

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第44号

平成29年3月14日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

四国・伊予得能山・常石城を本拠とした得能氏

後醍醐天皇の還幸を、兵庫沖、洋上から出迎える

— 新田義貞に従い、金ヶ崎で壮絶な最後 —

正成千早籠城に呼応した伊予・得能氏

堀の切り落としや丸太、糞尿、熱湯などの投下、藁人形による囷などの奇襲作戦で世に知られる楠木正成の千早攻防戦は、元弘3年2月の上赤坂城の落城以後、約100日間続く。この正成の籠城作戦に呼応して全国で官方武士が蜂起し、後醍醐天皇の京都帰京へと繋がるのである。

官方武士の蜂起は、四国、伊予の国においても、河野氏から分かれた得能、土井氏等が、早くも元弘3年正月には立ち上がり、石井浜、星岡の戦いで、幕府方の長門探題北条時宗を破っている。

このレポートは、会員の一人、木村さんが四国得能氏の末裔と云うことが分かり、木村さんの妹さんが調べられた愛媛県史をもとに、まとめたものである。

幕府方を貫いた河野氏宗家

河野氏は、平安末期には清盛率いる平氏の傘下にあったが、源平合戦において河野通信は頼朝に従い鎌倉幕府の御家人となって西国に在りながら大きな力をつけた。

元寇の時には通有が活躍して武名を馳せ、最盛期を築いたが、死後、家督をめぐる内紛が勃発、元弘の変では、一族の大半が倒幕に立ちあがったものの、惣領である河野通盛は幕府に従い、建武政権後、衰退した。

南北朝時代になり、伊予へ侵攻した細川氏と争い、通盛は伊予守護職を手にするが、通朝は細川に攻められ討死、九州に逃れた通堯は懐良親王に従うが、細川頼之の失脚で再び幕府に帰服し、頼之追討令を受けて細川方と戦い、この時奇襲を受け戦死する。

室町時代、戦国時代と内紛と有力国人との抗争をくりかえし、国内支配を強固にすることができず、加えて家督争いも絶えなかった。

国内に河野氏に属さない勢力が存在し、土佐一条氏、豊後大友氏、讃岐三好氏等との抗争が続き、安芸毛利氏の支援を受けた。長宗我部氏の侵攻などが続く中、天正13年(1585)秀吉による四国征伐において通直は降伏し、大名としての道を絶たれ、2年後、通直の死を以って河野氏は滅亡した。(系図は、愛媛県史掲載)

一貫して南朝に与した得能氏

伊予の国で南朝に与したのが、得能氏、土居氏、忽那氏、祝氏等である。

得能氏は、鎌倉時代初期に活躍した河野通信の子、通俊を祖とする河野氏の支族で、伊予の国桑村郡得能荘(現周桑郡丹原町)を領有し、得能山上に常石城を築いて本拠とした。

通純の後、得能氏は弟の通村が継承し、南北朝期に南朝方として活躍する通綱へと続く。一方、通純の子に通景があり、その子通宗が重見の姓を称した。

得能氏の南朝との関係を示す史料として、

旧温泉郡南吉井村野田の得能家に伝わる「善功録」が

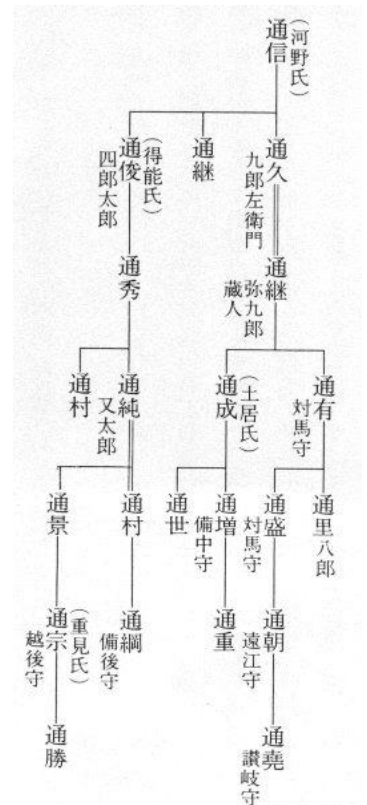


図2-1 河野一族関係系図

り、得能通宗は大塔の宮護良親王から幕府討伐の令旨を受けた、との記載がある。

宗家の河野氏が幕府の信任を受けて隆盛であったため、得能氏や土居氏は対抗できなかったと思われるが、全国的に惣領制の崩れる時期であったことから、比較的自由的な態度を取り得たと思われる。特に、得能氏の始祖、通俊は承久の乱で後鳥羽上皇側に味方し、風早郡高縄山城で戦死していることから、北条氏に反意を懐いていたと想像される。

太平記や楠木合戦注文等によると、得能、土居氏は、楠木正成が千早籠城戦を戦っていた元弘3年(1333)の正月から2月にかけて、挙兵・出動していたものと思われる。

元弘3年2月、石井浜の戦い

この年2月、反幕府勢力討伐のため長門探題北条時直は伊予に向けて越智郡石井浜(現今治市)に上陸しようとするが、土居、祝、忽那、得能氏らの奮戦によって敗走させられている(石井浜の戦い)。(三島家文書・550)

そしてこれら反幕府軍は、喜多郡に入り、宇都宮貞泰を根来城に攻撃、3月1日から11日に及ぶ戦鬪で陥落させる。(忽那一族軍忠次第・三島家文書)

元弘3年3月、星岡の戦い

北条時直は、再度の襲撃を試み、土居氏の本拠石井郷(現松山市)に軍を進めた。星岡を中心に広い範囲にわたる大規模な戦鬪を繰り返し、時直の軍は得能、土居氏等反幕府軍の精鋭のために撃退され、逃走、越智郡に落ち延び、便船を得て長府へ逃れ去った(星岡の戦い)。(忽那一族軍忠次第・三島家文書・楠木合戦注文・土居氏系図等)



5月7日には、得能、土居、忽那、祝氏等連合軍は、讃岐国鳥坂(香川県三豊郡三野町と善通寺市の境)まで遠征し、幕府軍を粉砕した。(忽那一族軍忠次第・三島家文書)

5月23日、六波羅探題陥落の報を聞き、伯耆の国船上山を発した後醍醐天皇は、5月30日、兵庫の国福巖寺に入っているが、この時、得能・土居氏等は軍船を兵庫の沖に回漕して後醍醐天皇を向かえている。(太平記巻七・天正本太平記)

得能通綱、従五位下備後の守に

建武政権が発足すると、得能通綱は従五位下備後の守

に、また土居通増は従五位下伊予権介、後に備中の守にそれぞれ任官された。(得能累世一覽・善功録・土居氏系図)

幕府方・反幕府方による一大決戦となった湊川の戦いでは、得能・土居両氏の軍は新田義貞の陣営にあって、足利直義、吉良・石堂の大軍を奮戦した。この時、尊



氏の水軍の中に河野通盛部下の水軍が加わっていた。(太平記巻十六・新田殿湊川合戦の事、同・経島合戦)

「梅松論」「神田本太平記」によると、この湊川の戦いにおいて、河野氏勢の中に武将大森盛長(彦七)がいて、正成の陣営に突入し、ついで正成を自殺させるに至った旨の記載がある。

新田義貞に従い、金ヶ崎城で戦死

建武新政以来、得能通綱・土居通増は近畿にいて、新田義貞の配下に属し活動していた。が、官方の形勢次第に不利となり、後醍醐天皇は比叡山に難を避け、延元元年12月、南朝勢力の再建を期して新田義貞は北国に赴くこととなり、脇屋義助、子義頼と共に得能通綱・土居通増も従い出立した。

途中、越前の国に差し掛かったところで、武家方の足利高経の襲撃を受け、後陣にあった得能通綱・土居通増は集中攻撃を受け悪戦苦闘し、土居通増は一族とともに壮烈な戦死を遂げた。(梅松論)一方、得能通綱は無事越前の国金ヶ崎城に入った。

金ヶ崎城は防戦に死力を尽くしたが、武家方の足利高経は高師直の支援を受け、攻撃を仕掛けたため、翌年3月6日、得能通綱は餓死寸前のところ槍を杖にして起き上がり、搦め手門に突入した敵陣と相まみえたが衆寡敵せず、戦死を遂げた。(太平記巻十八 金ヶ崎落城の事)

太平記は、通綱の最期を「搦め手から攻め込む敵を防いで一時間ほど戦ったのだが、もはや今は精も根も尽き果て、深い傷も負ったので、攻め口を一步も退かず、32人が腹を切って同じ場所で倒れた。」と記している。

写真: ←陸軍中尉仙波太郎が、明治15年、土井氏・得能氏を讃えて星岡山山頂に建立した「星岡表忠之碑」 ↑陸軍大将秋山好古揮毫による常石山城跡(西条市)に建つ得能通綱の「忠魂碑」

(文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭)